

東京 2020 パラリンピックに参加して

櫻井博紀¹⁾

1) 常葉大学保健医療学部理学療法学科

要 旨

今回、2021年8月24日から2021年9月5日に開催された東京2020パラリンピック競技大会で、ボッチャ競技のコーチとして参加する機会を得たので、ボッチャの競技概要を紹介し、大会結果および大会期間中のかかわりについて経験してきたことをここに報告する。

キーワード：ボッチャ、パラリンピック

<競技概要>

東京2020パラリンピックは新型コロナウイルスの影響で1年延期され2021年8月24日に開幕された。史上最多の4403人が参加し、多様性を認め合い調和した「共生社会」をテーマとして行われた。

今回、私が関わったボッチャ競技は、有明体操競技場において、8月28日から9月1日まで個人戦、9月2日から9月4日まで団体戦が行われた。

ボッチャは重い障がいのある人のために考案されたスポーツで、1988年のソウル大会からパラリンピックの公式種目として取り入れられている。ジャックボールと呼ばれる白のボールに、赤・青それぞれ6個のボールで対戦し、どちらが多くボールを近づけられるかを競う。的であるジャックボールの位置が変化することにより戦術が多彩にあり、先を読んで戦うなど技術だけでなく頭脳戦が必要となる。

クラス	対象	投球	アシスタント
BC1	脳原生疾患	可 (足蹴り可)	○
BC2	脳原生疾患	可	×
BC3	脳原生疾患／非脳原生疾患	不可で勾配具を使用	○
BC4	非脳原生疾患	可	△ (足蹴り選手のみ)

図1. 日本障がい者スポーツ協会 簡単ボッチャガイド

障がいの内容や程度により BC1~BC4 の 4 クラスに分けられる (図 1)。

今回の東京 2020 パラリンピックでは、種目として、個人戦 (BC1, BC2, BC3, BC4)、団体戦 (チーム BC1/BC2, ペア BC3, ペア BC4) の 7 つの種目で競技が開催された。その中で、私は BC4 クラスのコーチとして参加した。

<大会結果>

個人戦については、BC1~BC4 から計 7 人が出場した。そのうちベスト 8 となる予選通過は杉村英孝選手 1 人であったが、その後接戦を勝ち抜きボッチャ個人戦で日本史上初の金メダルを獲得した。団体戦では、BC1/2 の混合で行うチーム戦、同クラスの選手 2 人で組む BC3 ペア戦、BC4 ペア戦に出場した。チーム戦ではリオ大会に続き 2 大会連続メダルとなる銅メダルを獲得し、BC3 ペアでは初出場ながら銀メダルを獲得した。BC4 ペアは、本来パラリンピックは世界ランキング 10 位までしか出場できないが、今回ホスト国枠でランキング 19 位ながら出場することができ、その中で 8 位入賞と健闘しました。

今回、個人・団体合わせて金・銀・銅メダルと各メダル 1 つずつ獲得でき、ボッチャ競技の中でメダル獲得数 3 位であった。また、出場した全選手が入賞することができたことは意義があった。

<大会期間中の関わり>

競技期間は 8 月 28 日から 9 月 4 日までとなるが、事前の公式練習期間があるため、8 月 22 日から選手村に入村した。感染対策として基本的に滞在場所は選手村と競技会場だけであり、そこでの関わりとなった。

関わりとして、大きく分けるとコーチング、コンディショニング、生活介助の 3 つがある。コーチングについては、公式練習の中で選手の投球状態をみて体の使い方、投球動作など

に対するアドバイスを行うことや、対戦相手を想定した戦術を確認したりする。また、コートの状態や気温などの環境を考慮してボールの転がりなども確認する。試合直前の流れとしては、ウォーミングアップ練習、コールルーム入室、試合となるが、ウォーミングアップでは公式練習と同様の確認を行い、コールルームには一緒に入室し、戦術確認や選手がリラックスできるように会話をしたりする。試合では、団体戦のみコーチがベンチに入れるため、その際にはゲーム間に次のゲームの方針などを伝えることや、激励をおこなう。また、選手村の部屋割をほぼクラスごとにしており、選手とコミュニケーションがとりやすい環境としていた。

コンディショニングについては、主にトレーナースタッフが担うが、私が理学療法士ということでコンディショニングにも関わった。練習前、試合前にその日の身体状態を確認して投球しやすいようにストレッチなどをおこない、実際の投球をみながら調整をしていく。また、試合後にも次の試合に備えて休息やリラクゼーション、また、栄養補給などコンディショニングに気を付ける。選手村では、選手の風呂後にベッド上でコンディショニングをおこない明日に疲れを残さないようにする。

生活介助に関しては、先述したようにボッチャは最重度の障がい程度の選手となるため、食事・移動・トイレ・入浴などの生活介助をおこなう。その中で、食事量や体の動き、疲れ具合などを確認しながらコミュニケーションの場となっている。また、試合が始まるとなかなか時間が取れないが、公式練習期間では、空き時間に選手村内にある土産店に行ったり記念写真をとったりと、オンオフの切り替えや適度にリラックスしながら過ごした。

<活動を通して>

今大会での活動を通して、上記の関わりはパラリンピック期間内だけではなく、リモー

トでのミーティングなどなるべく密な関わりをできるようにし、チーム内でのコミュニケーションの円滑化を行ってきたことや、合宿での実際の試合を想定した取り組みといった、それまでの関わりの積み重ねが重要であることを改めて感じた。また、選手と競技スタッフだけでなく、心理スタッフ・栄養スタッフなど周囲のサポートがあったうえで成り立っており、さらに、大会期間中では、ボランティアの皆さん、組織委員会の皆さんのおかげで競技に集中することができたと感じる。それらすべてを含めて、選手がいつも通りの状態でプレーができる環境の設定を行うことの重要性を感じた。

パラリンピックの開催によって、無観客ではあったがTVやSNSを通じて、障がい者スポーツに対する認知度は確実に上がったと思われる。ただ、これを一過性の盛り上がり終わらせないように、共生社会の実現に向かって継続が大事であると思われる。そのためには、選手がさらに活躍できるようにサポートをしていくこととともに、地域での活動をしていくことで、障がい者スポーツに関わる選手、人材、サポーターを増やしていくことが必要で、そこには、障がいを理解して対応ができる理学療法士、作業療法士が重要な役割を果たすと思われる。